

日本余暇学会ニュース

発行所 日本余暇学会 発行人 藪田碩哉 発行日 平成二十一年十月二十五日

「余暇と観光」

観光関連4学会 研究大会を共同開催

……第十三回余暇学会大会総括……

第十三回を迎えた日本余暇学会研究大会は、9月26日、東京・白山の東洋大学を会場に、観光関連4学会（日本観光研究学会、日本国際観光学会、日本ホスピタリティイマネジメント学会、ツーリズム学会）との共同で開催された。4学会との共同開催で、例年とは異なる一日のプログラムであった。コンパクトで内容盛り沢山の活気に満ちた大会となった。

開会を告げる藪田会長の挨拶では、余暇活動の中でも昨今一際注目を集める観光を取上げ、「余暇と観光」を大会テーマ



午後から日本余暇学会会場では大社充氏（NPO法人グローバルキャンパス理事長）の講演が行われた。「『着地型観光』による観光まちづくり〜次世代ツーリズムの推進とライフスタイルイノベーション〜」と題し、次世

代ツーリズムへの過渡期にあるゲストの潮流を押しさえた上で、ホスト社会にみられる社会参加システムの変化と観光まちづくりとを絡めて、着地型観光の可能性について言及した大変示唆に富む内容であった。

その後の定期総会では、事業・決算報告、事業計画・予算案が承認され、続いて学会役員の見直しが行われた。二期目となる藪田会長以下、新役員が選出され、さらなる学会発展への意気込みが語られた。また来年度の研究大会については、中藤副会長の信州短期大学を開校とすることが表明された。

会費納入のお願い

平成21年度会費の納入をよろしくお願ひします。

口座番号:00140-9-729065
加入者名:日本余暇学会
会費:一般会員10,000円
学生会員5,000円

*新しい学会パンフレットができました。
余暇に関心のある方に、入会をお勧めください。

日本余暇学会定期総会
平成21年9月26日

議事
議案1 平成20(2008)年度の事業報告及び決算報告の結果、満場一致で承認された。
議案2 平成20(2008)年度 監査結果報告の結果、満場一致で承認された。
議案3 平成21(2009)年度 事業計画及び予算の提案の際、会員の一人から、研究誌売上が昨年度の10倍になっていることに対し、質問があった。事務局から会員を増やして調達したいと回答がなされた結果、満場一致で承認された。
議案4 余暇学研究投稿規程改定についての報告がなされた。
議案5 平成21(2009)年度～平成22(2010)年度 役員提案の結果、満場一致で承認された。

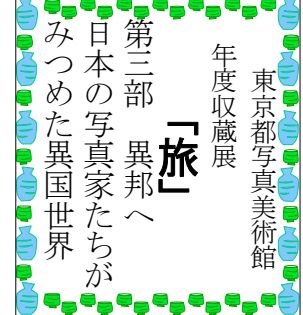
9月26日「日本余暇学会総会」において以下の新役員が承認されました。

日本余暇学会役員名簿
平成21年9月26日

会長 藪田碩哉	実践女子短期大学
副会長 中藤保則	信州短期大学
理事	
有馬廣實	拓殖大学
杉座秀親	尚絅学院大学
下島康史	桜美林大学
高橋 進	共栄大学
辰巳厚子	聖徳大学・実践短期大学
中村茂徳	NPO余暇協会
宮入恭平	ミュージシャン
師岡文男	上智大学
山田貴史	湘央学園
山本 存	甲南女子大学
(以上理事12名)	
会計監事 飯坂徳雄	
顧問 山岡平三	
石川弘義	元・成城大学教授
瀬沼克彰	桜美林大学名誉教授

大会会場において、観光・余暇関係諸学会共同シンポジウムが行われた。5学会の会長が登壇し、会場の松園東洋大学教授がコーディネーターを務め、「観光・余暇研究の現在・未来」と題し議論が交わされた。観光庁が誕生し、産・官を中心に観光立国に湧く我が国であるが、アカデミックフィールド(学)についても、関連する複数の学会間で連携することが必要ではないかとの提言があった。藪田日本余暇学会会長も壇上において、観光の土台である余暇の重要性にはじまり、これまでの余暇学の歩みを丁寧な解説し、余暇学の現状と未来について言及した。観光問題を考える上での余暇学の重要性を示すとともに、観光研究者に対して、日本余暇学会の存在意義を大きく示すことができたと、私は聴衆の一人として感じた。

その後、学生食堂に場所を移し、共同



「旅」
第三部 異邦へ
日本写真家たちがみつめた異国世界

年度収蔵展
東京都写真美術館

ニューズレター前号で紹介した、東京都写真美術館年度収蔵展「旅」の展示が、いよいよ最終部「第三部」を迎えた(期間九月二十九日～十一月二十三日)。第一部は外国人が見た日本を中心とし

た「外国」の様子、第二部は日本人カメラマンが撮影した日本の様子を中心とした展示だった。第三部は日本人カメラマンによる海外写真の展示である。

時代は二十世紀前半から現代まで、様々な日本人カメラマンによって撮影された、ヨーロッパを中心とした「外国」の写真が主である。

異邦へ旅立った日本人写真家は、様々なイメージの源泉を独自の視点から切り取り、異国の情緒を、多面的に彩っている。

同時代の同じ場所を様々な写真家が競うように撮影しているのも面白い。例えば福原信三と安本江陽は戦前のヨーロッパを切り取っているが、そのアングルは異なり、福原は人と風景の調和を描き、安本は建造物の存在感に圧倒されている彼の心象を表している。

また、彼らの撮影の対象は「異邦」へのまなざしというべきものであり、現代のわれわれがテレビなどで見る「外国」とは異なる趣をもっている。彼らは未知の土地の写真

を撮影しているのであり、高速な情報伝達で世界がつながっている時代の、すでに見たことがある「外国」の風景を確認する旅ではない。

確かに戦前の写真は船や鉄道によって、海を山を越え、何日もかかって届けられたような趣がある。それらの写真は地理的な情報をいかにして手に入れるかという「努力」が見て取れるが、現代の写真にはそのような堅苦しさはなくなっている。だが、いわゆる「グローバル化」の急速なる伸展は、「異邦」の写真を追いやった現代の写真家の「外国写真」すら、歴史の1ページに追いついてしまふのかもしれない、という印象を受けた。

なお、第三部では十一月十五日に川田喜久治氏、二十二日に港千尋氏の講演会が予定されている。

(東京都写真美術館は、JR・東京メトロ恵比寿駅下車、恵比寿ガーデンプレイス内)

(山田)

「着地型観光の現状と課題」
下嶋康史

着地型観光ブームに潜む影の部分を調査解明し、今回、報告させていただきました。当日、貴重なコメントを賜りました皆様と、調査にご協力賜りました皆様、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「子どもの余暇活動と学童保育に視点をあてて」
山本存

今回の発表は、学童保育現場での子どもたちのあそびの実態を質問紙調査で明らかにするものであった。男子において屋外あそびへの志向が高いことにフロアからコメントが寄せられた。これは、TVゲームなどのないあそび場環境の（指導員による）恣意的あるいは必然的な設定により、子どもの持つ活発な活動を引き出したのではないかと

いう結果に注目することであった。これからの課題としてとても興味深いものとなった。

「テレビ視聴環境とレイティングの一考察」
加藤裕康

発表では、暴力映像が及ぼす子どもへの影響を危惧して、テレビ・レイティングのシステムを採用しても、番組を格付けに従って分類する際に解釈の問題が入り込むこと、児童に対する商業的搾取の問題は回避されていることを踏まえて、カルチュラル・スタディーズや生態学的システム論の視座から子どもたちのテレビ視聴環境について検討し、「送り手」「受け手」「メッセージ」だけでなく、消費社会に着目して考察を深めました。

「社史を訪ねて 近代旅行業創始」
山岡平三

社会も学会も細分化され分断化している時代状況下にあつて、共同大会が

先日、ブラジルのリオが開催地に選ばれた瞬間、南米初の開催決定に「情熱の大陸」の国民は歓喜の渦に包まれた。一方、半世紀ぶりの開催を夢みた東京都は意気消沈し、平和の祭典を願う広島・長崎市が次期の立候補に声をあげた。オリンピックという国際スポーツの祭典は、今も私たちの夢や関心を惹きつけてやまない巨大なイベントであるようだ。

新刊紹介
坂上康博・高岡裕之編
『幻の東京オリンピックとその時代—戦時期のスポーツ・都市・身体—』
(青弓社) 2009
紹介者:小澤考人 (第5章担当)

とここでオリンピックとくといえ、私たち日本人がいつも高度成長期の明るい記憶とともに思い出すのは、一九六四年の東京オリンピックである。けれどもそれが「二度目」の開催決定であったことは一般に知られているだろうか。実は、時あたかも西暦一九四〇年、紀元二千六百年を記念した第十二回オリンピック大会の東京開催が一九三六年には決定していたのである。しかし日中戦争の長期化により一九三八年七

月、やむなく開催返上。ここに夢と消えた「幻の東京オリンピック」は、まさに戦時期のスポーツや余暇・娯楽など広く大衆文化の置かれた状況を象徴していた。つまり「暗い谷間」の時代を迎

開催された事は、誠に喜ばしい事だったと思えます。何故なら、細分化分析

第十三回 研究大会
研究発表者の「声」
今大会の研究発表者から寄せられた「声」を
発表順に掲載します。

観光学との対話を進めよう
5学会共同シンポジウムに
参加して
蘭田碩哉

今回の合同学会のハイライトは夕刻に行われた5学会会長によるシンポジウムであった。日本観光研究学会・安島博幸(立大)、日本国際観光学会・香川眞(流通経済大)、日本ホスピタリティ・マネジメント学会・山上徹(同志社女子大)、ツーリズム学会・井上博文(重慶大)

第11回世界レジャー学会・展示会
と
第1回ワールドレジャーゲームズ
期日: 2010年8月28日(土)~9月5日(日)
(学会: 8月28日~9月2日)
会場: 大韓民国春川市
(ChunCheon: ソウルから車で40分)
テーマ: レジャーとアイデンティティ
内容: 基調講演、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表、ポスター発表、学生セッションほか
参加者: 約70カ国 約2,000名
参加申込: 12月1日受付開始
発表申込: 10月1日~1月31日
www.worldleisure2010.org
参加ツアー: 日本通運(株) 首都圏旅行支店第2課 岡部 03-6251-6352, 080-5934-5630 (予定)
主催: 世界レジャー協会
(余暇問題に関する国連アドバイザー、「レジャー憲章」制定者)

時代』が捉えなおそうとするのは、このような通説的イメージであり、より本質的には「幻の東京オリンピック」に伴う文化的・社会的なインパクトの歴史的な検証である。はたして「幻の東京オリンピック」は「幻」に消えただけで、何も生み出さなかったのだろうか。このように問いを立ててみると、不思議な疑問がいくつも浮かび上がる。

や公園・緑地は、いったいいかなる理由によるのだろうか。戦時状況の深まる中で、スポーツ界はいかなる抵抗を見せ、自らを再定義していったのか。この時期に脚光を浴びた武道や集団体操はなぜ、またどのように一九三〇年代から奨励され量産されたのか。さらにポスターや広告、ラジオや新聞報道などのメディアは、いかなる動きを見せたのか。

○「二」などをくむ視点で、理論的視座にたつ実証研究だといえる。とはいえず、堅苦しい話はぬきにして、まずは百点以上におよぶ豊富な写真・イメージから、「時代」の空気とともに立ち上がる当時のスポーツ文化や余暇・娯楽の一面を気軽にのぞいて見ることもできる。二〇一六年の東京開催が消えた今、あらためて「幻の東京オリンピック」を一見されてみてはいかが

以下の方が入会されました。
天野 勤 (聖徳大学 教授)
近藤 真司 (全日本社会教育連合会 雑誌「社会教育」編集長)
山縣 裕紀

え、軍部の圧力や愛国主義の高揚に伴う自粛ムードの中で弾圧や抑圧が深刻化していったのだとい

本書は、このようなまだ十分に問われざる疑問や問いをはじめ正面から答えようとした歴史的研究の成果である。全文四八八ページ、ボリューム感のある全十二章は、いずれも歴史的記述の力作であり、これまでの研究史をいくつもの側面から取りかえる研究書となっている。またその多くは歴史的研究という形をと

「余暇学再編プロジェクト」からお知らせ
余暇学再編プロジェクトでは、専用のウェブサイトを設置しました。これまでプロジェクトの活動状況やミーティング日程などは、日本余暇学会の公式サイトで「お知らせ」として掲載してきました。しかし、より最新の情報を迅速に提供するためには、プロジェクトが独自にサイトを管理することが望ましいだろうということから、専用サイトを設置しました。現時点では試験運用の段階ですが、より多くの方々の「声」が反映されるサイトにしたいと考えています。
*余暇学再編プロジェクトサイトへは、日本余暇学会ホームページ「研究会・分科会活動」にリンクしてあります。